

照

常

(1)

常照

第872号

●初盆を迎える

初盆あるいは新盆。一般的に四十九日が過ぎてから初めてお迎えするお盆のことを意味するようです。

浄土真宗では今生の命を終えた後は極楽浄土に生まれ(往生して)仏とならせていただく、こんな風に阿弥陀さまのみ教えを聞かせていただくため、初盆または新盆という風習が他宗派に比べて重要視されていないような気がします。みなさまのお寺ではいかがで

しょうか？

うちのお寺では、毎年本堂で初盆法要を勤めております。その案内を作成し発送するのが七月上旬です。不思議なもので、昨年のお盆あたりからさかのぼりこの一年間にご逝去された方々の名簿を見る。図らずも一年間いろいろあったことを思いだす機会にもなるのです。

●糸の切れた風のように

こんな別れがありました。健康そのものというお若い年代の方が、いわゆる突然死という出来事によってご逝去されました。お通夜お葬式にたくさんの方が参列してくださり、一緒に悲しみの中ではありましたが一生懸命にご

法話に耳を傾けてくださいました。

お葬式の後も初七日からの中陰、納骨。そのたびにご遺族の言葉に耳を傾けようと思いましたが、遺族のみなさんは時間の経過とともに亡くなった実感が増し、言葉にならないという様子でした。それはまるで糸の切れた風のようでした。何か言葉を、声をかけようと思いつながらにも気の利いた事も言えず、遺族と対面する度に僧侶としての資質を問われているような自責の念を抱いたことです。

●「死」を意識する

今までの私はどうだったのかと自問します。そのうち順番がまわってきて命を終えていくからしかたないよなあ

とぼんやりと考えていました。周りの人は年をとりたくないだの好き勝手な事を言っていました。「この人生はいつまでも続かない」ということを私たちは忘れてしまったのかもしれない。

しかし見まわすと昔はたくさん兄弟がいてそのうち何人かは幼くして亡くなり、若くして亡くなり。そんなことが当たり前にあったといろんな家の過去帳や遺影写真が教えてくれます。「死」を意識する瞬間がもっとたくさんあったのでしょうか。だからといって前述のご家庭で「あなただけではないですよ」と軽々しく慰めることもできません。

ただ、四十九日までのお参りの中で耳を傾けてくださった話もありました。本願寺の第八代宗主、蓮如上人が書き

残した白骨の御文章（御文）ができあがった背景とその物語です。

●人間の浮生なる相

作者である蓮如上人が五十五歳の頃、文明二年に奥様の蓮祐尼様が亡くなり、翌年の冬に十二歳の五女が急逝、さらにその六日後に長女が二十八歳で今生の命を終えてしまうのです。また、翌年の夏には六歳の六女が急逝、その約二週間後に二十五歳の次女が亡くなりました。

ほんのわずかの間に妻と子ども併せて五人に先立たれる。しかも自分より若い世代の人達ばかり。時同じくしてお寺の近くに住む武士の娘さん。縁談がまとまった後、挙式当日に急死、両

親もシヨツクのあまりあとを追うように急死。こんな出来事があったそうです。さらに近所で訃報の連鎖が……という状況で世の中の無常（諸行無常）すべての物事は変化・消滅していく）について教えてほしいとのご依頼に對して書かれたのが白骨の御文章（お手紙）です。

世の中には忘れることもできない、立ち上がることでできない悲しみがあることを実感された蓮如上人。このお手紙の冒頭には「人間の相（すがた）は浮生（ふしょう）である」と記されています。地に足をつけて生きているつもりでも、根無し草のごとく地に根を張らず、水に浮かぶようなそんな頼りない生き方をしているというのです。

●老少不定のさかい

ここでお手紙のすべてをお伝えすることはできませんが、【人間のはかなき事は老少不定のさかい】であるところからためてお示しさせていただきます。あなたの、私の寿命は老若にかかわらずいつ尽きるか分からないという意味で、仏教の死生観を説く言葉です。この言葉の中に多くの涙と別れがあったことが偲ばれます。誰かの訃報に対して「かわいそう」ということではなく、「いつ命が終わってもおかしくないということ」を教えてくださった「私は今日のこの一日に、命に感動と感謝を忘れてはいけない」と思いをいたしお念仏申すことであります。

南無阿弥陀仏

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 二二一〇七四番
 FAX (〇三三) 二九一四〇八番
 テレホン法話 二七一六一六番

私自身も

「朝あしたには紅顔こうがんありて夕ゆふべには

白骨となれる身」

であつたのだ